

『パルムの僧院』

金子 守

〔第一章〕 序 考

此の La Chartreuse de Parme が 〈L'origine de la grandeur de la famille Farnèse〉 なる古記録にその 〈source〉 を求めていることは周知の事実であるが、Fabrice と目される人物に焦点を定めて小説の 〈modèle〉 を紹介したいと思う。そこには Le Rouge et le Noir とその 〈source〉 であった Berthé 事件との関係が同様に認められる筈である。

古記録に登場する Alexandre が Fabrice の 〈modèle〉 であるが、Alexandre の生れたのは1458年で Farnèse 家の Pierre-Louis の息子であり、その母は Giovannella Gaetano である。彼の生年は作家が憧憬していた情熱の世紀、すなわち、15世紀である。此の事実はすでに Alexandre が作家 Stendhal の主人公 Fabrice となる十分な資格を有することになる。成人した Alexandre がギリシヤ、ラテン文学に秀いでた才能を示したとはいえ、彼はなによりも肉体の快楽に耽溺したと言われる。彼は枢機郷 Rodéric に仕えたが、枢機郷は Alexandre の叔母である Vandozza を熱愛していたので、恋人の甥である Alexandre を可愛がりその保護者となったのである。

それで、小説では Mosca 伯は Fabrice の叔母である Sansevérina 公爵夫人を熱愛していたがゆえに夫人の甥を保護している。

さて、Alexandre は両者の保護をいいことに傲慢となり、益々道楽を重ねた。ある日、ローマ郊外を馬車で通行中の妙齡の貴婦人を略奪した。そし

て、彼は自宅に幾日も彼女を監禁して、恰も彼女が自分の妻であるかの如く振舞ったのである。此の事件で彼は Innocent 8 世に訴えられ、Saint-Ange 城の牢獄の身となった。やがて、Rodéric 枢機卿と、Farnèse 家の一員である Pierre Marzano の策謀により牢獄から脱走した。Fabrice の如く綱をつたって街路に降り立ったと言う。Innocent 8 世の治世下では運命に見離されていた Alexandre も Rodéric 枢機卿が Alexandre 6 世として法王の位に登るに及びローマに戻った。

法王と叔母 Vandozza の保護、殊に彼が叔母から感じている恩誼で 24 才の若年で彼は枢機官位を得るに至った。

Henri Martineau は上述した *modèle* の重要性を認識した最初の 1 人が Pierre Martino であり、その Martino には次の如き簡潔な説明があることを指摘している。

〈La vie d'Alexandre Farnèse est devenu celle de Fabrice del Dongo. Vandozza s'appelle la San Severina ; Rodéric est le comte de Mosca. C'est le crédit de la San Severina, maîtresse du premier ministre, qui fait la fortune du neveu chéri ; la jeune femme enlevée par Alexandre a pris les traits d'une petite comédienne ; le château Saint-Ange est devenu l'imaginaire tour Farnèse ; les circonstances de l'évasion n'ont pas été modifiées ; Fabrice devient coadjuteur de l'archevêque, comme Alexandre cardinal. L'épisode des amours secrètes d'Alexandre et de Clelia a donné l'idée de la passion de Fabrice pour Clélia Conti. Stendhal à reproduit jusqu'à la circonstance d'un enfant né de cet amour.〉 — [1]

このように *<source>* や *<modèle>* を明白にすると小説を読んでいる読者には恰もこの作品の極めて完全な梗概を与えられたかの如き印象を覚えるであろう。かかる印象からわれわれ研究者には作家 Stendhal 自身がこの小説の創作にあってかなり容易に筆を進めることができたのではないかと思わ

せる。

Jean Prévost もかかる印象を感じている。

〈Plus heureux que dans Lucien Leuwen, aussi heureux sans doute qu'il le fut en écrivant le Rouge, aucun plan ne le gêne, et pourtant à chaque moment il sait où il va, Au lieu de plan il a en tête une anecdote qu'il connaît bien, et qu'il s'agit de transposer.〉 —〔2〕

此のことは作家の容易な創作に反比例するかの如く逆に研究者にある種のとまどいを覚えさせている。Henri Martineau の研究を観てもかかる印象を受けるのであるが、彼は〈modèle〉とか作品の着想の場所とかその時期を先ず問題にしている。彼の『L'Œuvre de Stendhal』を注意深く読んで観ると、此の作品の着想の場所とかその時期とかに就いては Paul Arbelet の説を否定している。

そして、場所の問題に就いては Martineau は解決されたことと看做して次の如き見解を述べている。

〈Le problème est désormais résolu : la Chartreuse fut composée rue Caumartin et non pas rue Godot-de-Mauroy comme l'a avancé Paul Arbelet.〉 —〔3〕

また、着想時期に就いては、

〈C'est alors que, suivant l'hypothèse vraisemblable de Paul Arbelet, il traça sans doute le plan détaillé et déjà lourd d'inventions personnelles que Colomb a publié dans la Correspondance sous la date improbable de 1832. C'est une première adaptation de la chronique italienne.〉 —〔4〕

この Colomb の証言を Paul Arbelet は鵜呑みにしていると、Henri Martineau は批難する。しかし、Martineau 自身は小説の原稿が Stendhal の従弟 Colomb に渡されたのは1838年12月26日のことであると断定している。Colomb は『Le Rouge et le Noir』の出版者と直ぐ刊行の交渉を持っ

たが Levavasseur との条件がまとまらず、先に『Les Mémoires d'un Touriste』を出版していた Ambroise Dupont と契約している。

ところどころかかる問題をこれ以上、私は絮説しようとは思っていない。すでに『Lucien Leuwen』を論考した際に示唆した如く私の小説研究は作品そのものを対象にしているのであって、瑣細な実証的研究の弊害に就いては『Le Rouge et le Noir』を研究した際にも指摘しておいた。

さて、此の小説は作家 Stendhal が生前に受けた唯一の賞讃を得たものである。と言うのも Balzac が発行していた〈Revue Parisienne〉の第3号のなかで、1840年の9月25日に刊行された『La Chartreuse de Parme』を Balzac 自身が72頁にわたって解説し賞讃したのである。それも Balzac から現世紀の傑作と認められ、さらに Stendhal に執って嬉しいことはこの小説を読み、その真価を認識できるのは1500人ばかりのヨーロッパの最高頭脳を持った人々である。と、断言してくれたことであろう。何故ならば、すでに Stendhal は『La Chartreuse de Parme』を発表する以前に10冊ばかり世に問うたが、周知の如く若干の例外を除き悉く無視されてしまっていたからである。一方、Balzac は Stendhal よりも16才年下ではあったが、当時、彼は大部分の La Comédie humaine を書き終り、文名とみにあがる流行作家となっていたのである。

先述したばかりであるが、Balzac が〈Revue Parisienne〉で Stendhal のこの小説を誉めたのは、1840年9月25日であったが Henri Martineau によると、小説が出版されたばかりの頃、2人の作家は1839年4月11日に大通りで偶然邂逅したと言う。その日は晴れていて東の風が吹いていた。此の日付、及び、情報をわれわれに伝えたのは Stendhal である。此の邂逅に立ちあった批評家 Forgues の証言によると、Balzac は『La Chartreuse de Parme』の始めの数章を圧縮するべきであると彼に忠告していたけれども、同時に大いに誉めもしていたと言うことである。従って、Balzac は〈Revue Parisienne〉に Stendhal の作品論を書く前に本人に直接会い、自己の意見

を披瀝していたことになる。とにかく、Balzac の『La Chartreuse de Parme』論を少し引用しておこう。

〈La Chartreuse de Parme est dans notre époque et jusqu'à présent, à nos yeux, le chef-d'œuvre de la littérature d'idées…〉 —〔5〕

さらに、Balzac は以下の如く続けている。

〈M. Beyle a fait un livre où le sublime éclate de chapitre en chapitre. Il a produit à l'âge où les hommes trouvent rarement des sujets grandioses et après avoir écrit une vingtaine de volumes extrêmement spirituels, une œuvre qui ne peut être appréciée que par les âmes et par les gens vraiment supérieurs.〉 —〔6〕

此の引用文に続く文章は完璧とも言える小説の梗概となっている。

Stendhal が〈Revue Parisienne〉の問題の第3号を読んだのは1840年10月15日で、当日、彼は任地チヴィタ・ヴェッキアに居たのであるが、その翌日から Balzac 宛の長い感謝の手紙を書き始めていた。そして、10月29日に船便で Balzac に送った。

しかしながら、この Balzac の論文は買収されたものであると看做した批評家たちがいた。Sainte-Beuve の一派である。Sainte-Beuve は『Causeries Du Lundi』で尤もらしい根拠を挙げてこの論文を買収された^(注1)と断定しているのであるが、今日ではどう考えても信憑し難いと言われている。彼の主張は Stendhal が〈Revue des Deux Mondes〉と契約した〈Les Chroniques Italiennes〉の原稿料3000フランが Balzac に以前渡されたと言うのである。しかし、1842年に Stendhal が亡くなっているが、Colomb の証言に基づくとその稿料は彼の死亡日の前々日に始めて支払われた。だが、約束が実行されなかったので返却されたと言うことである。

此の問題に就いて Henri Martineau は傍証として Balzac が M^{me} Hanska に宛てた1840年4月14日の手紙を引用している。つまり Balzac が自分の恋人まで欺く必要はどこにもないからである。

dhal の人間像』、『Le Rouge et le Noir』、及び、『Lucien Leuwen』などを研究した際に屢々触れておいたのでこの論文では Angela と Juiulia とを取り挙げたいと思う。Angela と作中人物との関係であるが、Henri Martineau は『Le Cœur de Stendhal』のなかで、

〈Tel nous verrons, dans cette même Scala, le comte Mosca aux premiers jours de son adoration pour la comtesse Pietranera, au début de la Chartreuse de Parme.〉 — [10]

と、述べているが、此のスカラ座に姿を見せていたのは Angela である。それで、彼女に就いてその女性像を少しばかり浮彫りにしよう。承知の如く Stendhal がパリに出てきたのは理工科学校を受験するのが目的であったが、事實は彼が入学したのは軍隊であった。Napoléon がイタリアに侵入すると、従兄の Pierre Daru を追って彼もイタリアに姿を見せた。その当時、彼の同僚に彼より 10才ばかり年上の 27才になる Louis Joinville がいた。そして、問題の Angela に Stendhal を紹介したのが彼であった。彼は彼女の愛人であった。Angela の父は Antonio Borroni と称し布地商でフランス軍に衣服を供給し儲けていた。それで、軍人連中が自己の店に出入りするのを許していた。彼の 2人娘の姉が Angela であり、すでに小役人と結婚していて 5才になる子供があったと言う。彼女は 23才になっていたがロンバルデァ風の美女であった。此の時期すでに Stendhal は心のなかで彼女を愛し始めていたものの口に出すまでにはいたらなかった。それから 10年後 Angela は彼の恋人となる。両人の恋愛の成りゆきを調べてみよう。1811年 8月に Stendhal は秘命を帯びてミラノへ来た。彼の使命が如何なる内容のものであるかは明白ではない。これは『Le Rouge et le Noir』に於ける Julien の使命のヒントとなるであろう。しかし、Stendhal 個人には別の目的があった。9月 7日の夜、ミラノへ到着している。馬車から降りた彼は早速くスカラ座に駆けつける。懐しさが烈しい感動を呼び彼の頬には感動の涙が流れる。小説で Mosca 伯がこの役を再演する。Stendhal の脳裏に青春時代

の追憶が走馬灯の如く浮び眼前の場景と重なり融合したことであろう。彼自身に語って貰うとしよう。1811年9月4日の日記に次の如く読まれる。

〈Mon cœur est plein. J'ai éprouvé hier soir et aujourd'hui des sentiments pleins de délices. Je suis sur le point de pleurer... Ne pouvant être aimé de M^{me} Pietragrua, qui était aimée par Louis Joinville, dans les millions de châteaux en Espagne que j'ai faits pour elle, je me figurais de revenir un jour colonel ou avec tout autre avancement supérieur à celui d'employé de M. Daru, de l'embrasser alors et de fondre en larmes... Quelle parole que onze ans! Mes souvenirs n'étaient point amortis ; ils ont été vivifiés par un amour extrême. Je ne puis faire un pas dans Milan sans reconnaître quelque chose, et, il y a onze ans, j'aimais quelque chose parce qu'il appartenait à la ville qu'elle habitait.〉 — [11]

遂に Stendhal は胸中の女 Angela と再会する。彼は11年前の臆病さに相変らず捉えられている。最初、彼女は訪問客が誰であったのか見当もつかなかった。そこで、Stendhal は11年前の舞台を演出し、かつての彼女の愛人 Joinville のシルエットを出す必要があった。やっと彼女は当時美少年ならざる中国人と渾名されていた太ちの青二才が父の店に来る常連の1人であったことを思い出した。一方、彼は躊躇しながらも11年前から〈貴女を熱愛していました。〉と、告白した。聞き終った Angela はいとも無造作に、〈当時、どうしてそうお話しにならなかったの。〉と、答えたと伝えられている。かかる会話で始まった二人の再会はほどなく彼に幸福を得させることになる。けれども、実は Angela は彼女に魅せられた男たちを鵜匠の如く幾人も操つる悪女であった。その悪女ぶりを Stendhal は4年を経て思い知ることになる。しかし、11年間にできた結晶作用の力は大きく、幻滅がその正体を枯枝であると見抜くのに手間どるであろう。此の年の9月の毎日、あの Mosca 伯の如くスカラ座で観劇するよりもむしろ Angela の棧敷の方

が気になっていた。それほどの気持になっているのに抱らず愛する女から軽蔑されるのを怖れて隅の席でじっと動かずにいる晩が幾日も続いた。Stendhal は情熱あふれる愛が真物であると断言するのであるが、Angela は彼の誠実さを疑う素振りを見せて Stendhal をじらした。けれども、やがて彼女は彼の誠実さが真物であることを認め感極まって〈あんた〉と、Stendhal を呼んでいると言う。11年のあいだ愛し続け勝利の瞬間を願っていた彼が一方では勝利を得るのは嬉しいが、愛を窒息させてしまうのではないかと不安になる。Daru 伯から許下されていた期日の期限が迫っていた。そこで、9月21日の午前11時に非常にながくかかった勝負に結着があった。そこで、12時にはミラノを去り、Martial Daru に会いに行き、10月12日まる1ヶ月も不在にした後ですっかり日が暮れてからミラノへ帰った。彼が帰った日の2、3日前 Angela はラ・マドオナ・デル・モントへ行っていたので、翌日、彼は彼女を追った。彼女の滞在している館へゆくためには歩く必要があった。ところが途中で Stendhal は彼女の夫に偶然会ったと言う。やっと Angela に会ったのであるが激情に我を忘れて不器用に振舞い、心に溢れる愛情をうまく表現できず彼女を怒らせてしまった。一方、彼女は〈私の過去の姿だけを見て、私を危険にさらす。〉と、きつく彼を非難した。状況を胡魔化すためにも、追いかけて来たと言う印象を残さないためにも、直ぐ引返しポロメ島見物に行つてらしゃいと追放された。2日過ぎて彼女の許へ戻ったとき、Angela には立腹している様子がみられなかった。彼女は彼のこのような従順な態度に同情してか真夜中の逢引を約束した。しかし、実行しなかった。夜明けまで彼は待っていたと言う。今日は安心したり、明日は不安になったりしながら Angela の傍で暮らした Stendhal も11月13日遂に職務に復帰する決心をして、ミラノを去り、故郷グルノーブルに向った。1812年にはモスコウ遠征に彼も参加していた。1813年に一度ミラノへ来ている。9月16日から20日まで Stendhal はコモ湖に滞在し、Angela と共に湖上の逍遊を楽しんでいる。此の場は小説に於ける Sanseverina と Fabrice

の舟遊びとなるであろう。9月21日の夕方モンザにて彼は彼女と別れている。同じ月の25日、Angela からの便りを待っているために仕事もできないで、日記に〈待つ男の辛い立場にいる。〉などと記しているが、結局、待ちぼうけを喰っただけであった。当時、祖国は危機にあり、彼もグルノーブルに戻り、祖国防衛軍の組織作りを命じられて、その仕事に従事することになった。1814年4月 Napoléon の退位が決定される。程なく Stendhal の姿はミラノで眺められる。1814年8月28日にミラノから Beugnot 伯爵夫人に宛てた手紙がその間の事情を説明している。

〈C'est ce qui fait que mes conversations avec une dame de Milan (Angela) ne finissent pas ; c'est ce qui fait que toute sa société est jalouse du Français, et, comme elle a beaucoup de ménagements à garder, c'est ce qui fait qu'elle vient de m'exiler à Gênes ; j'y serai le 31 août ; pour combien de temps ? je l'ignore ... Je puis donc avoir des soupçons et la croire inconstante ; c'est ce que je viens de prendre la liberté de lui dire : de là, des larmes, une scène, et, comme j'ai enfin consenti à partir, je quitte Milan avec les tourments de la jalousie. Je lui ai offert d'aller habiter Venise ou toute autre ville, grande ou petite, qu'elle voudra ; elle doit m'écrire sa résolution à Gênes. Elle m'a fait demander son portrait et, pendant que j'écrivais cette lettre, on vient de me le rapporter dans un livre.〉 — [12]

1814年8月29日、Angela との約束を守りミラノを出発し13日にゼノアに到着している。そこで9月18日まで逗留し次にフロレンスで13日間滞在している。そして、10月13日にミラノへ戻っている。だが、Angela に思いがけない言葉で迎へられ、彼は哑然とした気持で日記に彼女の言葉を伝えている。

〈Elle me dit que comme, à Gênes, j'ai resté 15 jours sans lui écrire, tout est fini entre nous.〉 — [13]

年があけると今度はトリノに行かされている。そこから Stendhal は1815年1月14日、妹に手紙を出しているが、そのなかにも Simonetta 伯爵夫人 (Angela) の言葉が読まれる。

〈La jalousie de sangsue étant hors des gonds, madame Simonetta m'a représenté qu'il fallait faire une absence, Elle a ajouté qu'un vainqueur de Moscou ne craignait pas le froid et que, puisque l'Italie n'avancé pas à Cularo, je devrais y aller faire un tour ; que cela nous épargnerait une séparation, quand une fois nous serions établis à Venise. J'ai voulu plaider, inutile. Je suis donc venu à Turin…〉 — [14]

1月15日、トリノを出発して27日にミラノへ帰っている。そこで Stendhal は Angela を失うよりはと彼女の言うがままに忍従し翻弄されて7月25日まで暮らすことになるが、後年、Mérimé は Stendhal が打明けた Angela の娼婦ぶりを伝えている。ある日、彼女の侍女が鍵穴から女主人の寝室を彼に覗かせたとする。Stendhal は Angela の娼婦ぶりに愕然として別れるに至ったと言うのである。

このような Angela 像を観ると彼女の性格には小説の Sansevérina 公爵夫人に観られた性格の高貴さがまるで認められない。確かに Angela は Sansevérina の〈modèle〉に相異なる。しかし、あくまで外見的な範疇に留まる〈modèle〉と看做すべきであろう。その性格の〈modèle〉は métilde に観られるものである。けれども、Angela の奔放さを Sansevérina 公爵夫人は確かに継承している。公爵夫人のために始終翻弄される Mosca 伯は全篇を通じて Stendhal であり、単にスカラ座の場だけではない。

Jiulia に就いてわれわれは Stendhal がこの小説を創作中に Clélia が始めて Fabrice に身をまかせたあの感動的な場面を描写しながら、彼はかつて Jiulia が自分に身をまかせた往時を偲び 1人喜悦に浸っていたと言う。確かに Jiulia が Clélia の〈modèle〉であることを伺がわしめる話である。Stendhal 自身が Jiulia の性格は彼が愛した他の女たちの誰より優れ

ていたと、『Vie de Henri Brulard』で回想している彼女を少々浮彫りにしたいと思う。Giulia は1801年にイタリアのシェンナで生れている。父は Antonio Rinieri de'Rocchi と言い、太公の侍従であった。母は Anna Martini と言い、非常に優れた女性であったと伝えられている。兩人には3人の息子と4人の娘があったが Anna は1824年2月に亡くなっている。30年以上の年月に及んで彼女は Daniello Berlinghieri と交際していた。一方、Berlinghieri は彼女を意中の女性とし愛と友情を覚えていたと言われている。1826年11月10日、彼はフランス駐在のトスカナの公使としてパリに赴任したのであるが、その際に彼は Giulia を同伴し彼女を自己の姪としてパリ社交界に紹介した。

Stendhal は Cuvier のサロンで1826年の暮に彼等に邂逅している。此の Giulia が Stendhal に愛の素振りを見せ始めるのは年があけた1月21日のことであると言う。翌々日に兩人は Cuvier のサロンで一緒になり、散会するとき彼女は進んで彼に私の馬車であなたをお送らせて下さいと申し込んでいる。さすがに彼は18才の娘の気持を計りかねて驚いたらしい。Julien のセリフではないが〈彼女は本気かな。〉と心に思わず問うたであろう。1月27日に Giulia は Stendhal に愛を告白し、さらに翌月の3日にもこの告白を繰り返しているが、彼は彼女の言葉を書き留めている。

〈Je sais bien et depuis longtemps que tu es vieux et laid.〉 — [15]

こう囁きながら Giulia は Stendhal を強よく接吻したと言う。2月6日に彼女は彼の召使となる。召使とは Matilde が Julien に身をまかせて変らぬ愛を誓った際のおかしの言葉である。果して Giulia も Stendhal にそう誓い変らぬ愛のおかしとしたのであろうか。彼は Giulia との愛を覚書のなかで47才にして漸く用いることのできた戦法の勝利であると自惚れている。

如何なる事情があって Giulia は彼女自身が語っている如く年取った不器量者の Stendhal に身をまかせ、後述する如く結婚までする気持になったの

か。今日ではそこに計算された利害があったと看做されている。Giulia が叔父と称する Berlinghieri の姪としてパリへ来た目的は妻子のない裕福な彼の養女となることであった。ところが1829年も暮れようとしているのに、彼は一向に彼女を養女とする気配がなかった。Giulia は不安を感じ始める。なんとかしなければパリと言う異国の土地で1人きりになりかねないので、他の女性よりも早く身をかためたい境涯にあった。それでこうした一身上の理由から彼女は急に Stendhal に接近したと考えられている。1830年の7月革命は周知の如く彼をトリエステの公使とした。Stendhal はそれで求婚の好期が到来したと考えたのであろうか、Berlinghieri に Giulia との結婚の承認を求めた書簡を送る。

〈C'est peut-être une grande témérité, à moi, pauvre et vieux, de vous avouer que je regarderais le bonheur de ma vie comme assuré si je pouvais obtenir la main de M^{lle} votre nièce, ... Ma fortune à peu près unique est ma place ; j'ai quarante sept ans : je suis trop pauvre pour m'occuper de la fortune de Mademoiselle, Quand je serais riche, je ne m'en occuperais pas davantage. Je regarde comme un miracle d'avoir pu être aimé à quarante sept ans.〉 — [16]

此の書簡には1830年11月6日の日付がある。しかし、此の結婚は社会的個人的原因から不成立となった。

1833年4月1日、Giulia は突然 Stendhal に〈近々私は結婚する予定です。〉と、書き送っている。彼女の予告に仰天した彼は約10日間も費やして返事を書きあげたと言う。Stendhal は Giulia が前後の事情から Giulio Martini と結婚するのは決定的なものと悟ったらしいが、それでも諦観できず、一応、結婚を中止させようと目論んでいる。

〈Est-ce que je connais ce marquis? Est-il plus beau que moi, j'ai peine à le croire? Quand l'avez-vous vu pour la première fois? Vient-il tous les jours et à quelle heure? De quel pays est-il?〉

Pourquoi dites-vous que vous serez malheureuse? Le seul malheur est de mener une vie ennuyeuse. Sans vouloir vous offenser, car vous savez combien je vous suis attaché, il me semble que la vie que vous menez depuis deux ans peut être souvent ennuyeuse. A supposer tout ce qu'il y a de mieux, c'est la vie d'une femme de trente-cinq ans, et vous avez encore beaucoup de belles années avant cette époque de raison. Mais vous avez besoin d'un mari tel que l'homme de Vignano (=Berlinghieri), > — [17]

けれども Giulia は Stendhal 宛の手紙の日付より数日前に従兄 Giulio Martini を訪問し、親類同士の気安さからか急速に親しくなり、早くも彼に結婚申し込みの手紙を出していたと言われている。彼女は約4年前 Stendhal に示した以上に Giulio の心を積極的に掴み僅か1ヶ月後の6月4日に彼と結婚式を挙げる。此の結婚は Stendhal に執って心外であったであろう。彼は彼女との結婚に失敗した後も幾度も会った形跡がある。しかしながら彼はよもや Giulia がこんなにも突然結婚するなどとは露聊かも思っていなかったらしい。さすがに彼も彼女の結婚後は遠慮したと見えて、約10ヶ月程は彼女の前に姿を見せていないが、1834年5月4日に Stendhal が Gauthier 夫人に出した手紙から推察すると、彼は確かにまた Giulia に会っている。

<… On se dit : vais-je vivre, vais-je vieillir loin de ma partie ou de la partie? Cela est plus à la mode. Je passe toutes les soirées chez une marquise de dix-neuf ans, qui croit avoir de l'amitié pour votre serviteur. Quant à moi, elle est comme un bon canapé bien commode. Hélas ! rien de plus, je n'ai pas davantage ; et ce qui est bien pis, je ne désire pas davantage.> — [18]

しかしながら1834年以後の35年36年37年と彼がGiulia に会った証拠はないが、1837年に Giulia の養父 Berlinghieri が亡くなると、翌年の8

月と9月に彼は彼女に会っている。すなわち、8月3日と9月16日に彼女を訪問し、遂に9月21日、Julia は Stendhal の再度の挑戦を受けたと言う。彼は歓喜のためか気取りのためか英語で〈She gives things〉と記している。その後も二人の関係は彼の死まで続いたのである。そして、Stendhal が『La Chartreuse de Parme』を創作し始めたのは1838年9月3日のことである。その日から2週間を経て Julia は再び彼の召使いとなった。このような二人の関係はこの作品の Fabrice と Clélia との関係を連想させるなにかがある。

此の第2章で私は Angela と Julia とが作家 Stendhal と如何なる愛のかかわり方をしたのかを諒知することで彼女たちの作品像への投影を求めた。けれども、われわれ研究者のある者は〈modèle〉論を過小に評価する傾向がある。ある modèle が実在したことを実証するだけで終わったとする研究態度がかかる評価を導いたと言えるが、それは問題の把握の仕方が短絡的認識のなかで決定されているからである。作中人物の〈modèle〉は読者にも研究者にも野次馬的興味を確かに提供しよう。しかし、〈modèle〉論をそこまでと考える態度に研究の甘さがある。〈modèle〉が作家に如何なるのかかわり方をしたのかをその創作面で考える態度が必要なのである。此の作品で Stendhal は〈modèles〉から作中人物の心理の真実性を得ることに成功しているのである。そして、此の心証が小説を執筆している作家に執って如何なる意味を持っているかを私は先に発表した『Le Rouge et le Noir』論や『Lucien Leuwen』論ですでに説明しておいた。

〔第三章〕 作 品 像

此の小説を読みわれわれ読者が感じる印象は実に巧妙な伏線が作品像を強烈にしていることであると、私には思われる。伏線の使用と作中人物が伏線に如何なるからみ方を演じているかがこの小説を形成していると看做しても差支えない。例えば、Balzac は Stendhal に Blanès 師は作品に執って不

必要であると忠告したが、Stendhal は彼の忠告を聞きいれなかった。というのはこの作品の第1の伏線は Blanès 師がその役割を果しているからである。先に私は Predéstinisme とも言うべき伏線の研究を『Lucien Leuwen』論のなかで展開しておいたので、此の研究では伏線の一般論に就いては深く追求しない。

そこでかかる仕組を明瞭にすることを第3章の課題としようと思う。

Fabrice も Julien 同様 Napoléon に覚える憧憬を人生への門出とする。それは Julien に執って Napoléon の象徴である鷲を見ることが人生への第1歩であったように Fabrice も鷲を見る。Fabrice は Napoléon のエルバ島脱出を知って自己の行動を決定する。

《Le bateau a pris terre, l'agent a parlé bas à mon père, qui a changé de couleur, et nous a pris à part pour nous annoncer la terrible nouvelle. Je me tournai vers le lac sans autre but que de cacher les larmes de joie dont mes yeux étaient inondés. Tout à coup à une hauteur immense et à ma droite j'ai vu un aigle, l'oiseau de Napoléon ; il volait majestueusement se dirigeant vers la Suisse, et par conséquent vers Paris.》— [19]

かくて Fabrice はワテルロー戦役に参加する。一方、Julien は Napoléon の肖像を後生大事にする。彼等の情熱はすでに鷲が象徴している如く地上のものではない。そこには塵埃にまみれた俗人はいない。空に住むものは汚れてはそこに留まれない。雨水となって地上に落ちる。Fabrice は作家の分身となる前に父として Blanès 師を持ち、母として Sansevérina 公爵夫人を持った。両人は我が子の運命を気遣う。グリアンタから出征するには余りにも無邪気な彼に夫人は早くも予言する。

←Parlez donc avec plus de respect, dit la comtesse souriant au milieu de ses larmes, du sexe qui fera votre fortune ; car vous déplairez toujours aux hommes, vous avez trop de feu pour les âmes prosa-

iques.》 — [20]

Fabrice はワッテルローから無事に帰ることはできたが生家へは戻れなかった。兄の告発で追われる身となっていたのである。彼の不在のあいだに夫人の境遇にも変化があった。夫人はスカラ座で偶然会ったバルム公国の Mosca 伯と親しくなっていた。その縁で Fabrice もバルムへゆくことになる。それから4年後に作家は物語を再び始める。Fabrice は Marietta との気粉れの恋からグリアンタに一時身を隠す。そこで彼があったのは Blanès 師であり、Julien が Chélan 師からそうされた如く、83才を過ぎた老師は彼の運命を予言する。Balzac が Stendhal に不必要であると指摘した問題の部分である。それは第8章と第9章に読まれる。Blanès 師は Fabrice がワッテルロー戦役に参加し牢獄と無縁でなかったことを知って、

〈—Eh bien, ce fut un rare bonheur, car, averti par ma voix, ton âme peut se préparer à une autre prison bien autrement dure, bien plus terrible ! Probablement tu n'en sortiras que par un crime, mais, grâce au ciel, ce crime ne sera pas commis par toi.〉 — [21]

此の Blanès 師の予言は Shakespeare の傑作である『Macbeth』の紳託が示した重さをやがて伏線の形態を執って拡大するであろう。この老師の予言は囁語ならぬ真実の響きを絶えず Fabrice の耳許で奏で続けるであろう。すでに彼はこの予言の現実性を感じとっていた。

〈J'ai pour ainsi dire succédé à son être … et cela sans le vouloir ni le prévoir en aucune manière ! Gare la prison ! … Le présage est clair, j'aurai beaucoup à souffrir de la prison.〉 — [22]

Fabrice の運命はまさしくその通りとなるであろう。Stendhal は Fabrice の如く情熱的な人間は平凡さを超越しているがゆえに単純に予言を信じると読者の疑問を想定してか答えている。これはあらかじめ Balzac が発したが如き疑問に答えた結果ともなる。そして、作家は罪を犯すひとを準備する。しかも作家はすでに2人の女性を登場させている。例の如く Stendhal 小説

の女性像はこの作品にあっても踏襲されている。Stendhal は1人の主人公に2人の女主人公を配偶することを彼の特許の如く考えていた。2人とは母性的な姿勢を示す Sansevérina 公爵夫人（伯爵夫人はパルム公国で Sansevérina 公と形式的な結婚をしたがゆえに公爵夫人となる。）と、もう1人は Matilde の役割を作品で演じる Clélia とであるが、Julien が Rênal 夫人に覚えた愛を Fabrice は若い Clélia に覚える差がある。すでに Sansevérina は Blanès 師同様 Fabrice の将来を予言していることを確認しておいた。いま1人は Matilde より早くすでに第1部の第5章で姿を見せる Clélia である。彼女は舞台上に登場するやすでに公爵夫人が Fabrice に示した感情を見抜いている。

〈Après les premiers moments donnés à la politesse et aux commentaires sur le petit incident qui venait de se terminer, Clélia Conti remarqua la nuance d'enthousiasme avec laquelle une aussi belle dame que la comtesse (=Sansevérina) parlait à Fabrice ; certainement elle n'est pas sa mère.〉 — [23]

此の2人の女性も Fabrice が予感した宿命に決定的役割を占めることで作品の女主人公の資格を果している。先述した如く Fabrice が意識して愛し続けたのは Clélia であるが、一方、意識するしないにかかわらず全編にわたって Fabrice を愛し続けたのは Sansevérina 公爵夫人である。夫人は彼女自身が Fabrice の運命を開眼するのは女性であると、占ったが、その役を自ら演じたのであり、Blanès 師の予告によると Fabrice のために罪を犯すひとの役割を引き受けたのである。夫人は甥である彼が生れたときから成長するのを見守ってきた。しかし、ワテルロー戦役から帰還した Fabrice は少年ではなく逞ましい美青年に変貌していた。それで、夫人は彼をとときには母性的に、ときにはいわゆる恋の感情で愛し始めるのであるが、その愛は12才の Clélia がすでに見抜いた感情であった。しかしながら夫人自身も膜然とはあるが Fabrice に覚えている気持の性質を感じとって

た。そして、此の感情は如何なる場面に遭遇しても夫人に執って彼がある限り永遠のものである。早くも試練の1つが顔を見せて夫人を慄然とさせる。今夫人は Fabrice の将来を彼と話しあっている。夫人は彼にあなたは情熱的だから極端に走りやすいと忠告する。夫人の忠告に対する彼の返答は以下である。

〈—Moi enthousiaste ! répéta Fabrice ; étrange accusation ! Je ne puis pas même être amoureux ! —Comment ? s'écria la duchesse. —Quand j'ai l'honneur de faire la cour à une beauté, même de bonne naissance, et dévote, je ne puis penser à elle que quand je la vois. Cet aveu fit une étrange impression sur la duchesse.〉 — [24]

また、此の2人の親密さは Mosca 伯の気づくところとなる。Mosca 伯は Fabrice に好感を覚えただけに彼の苦惱はいっそう深い。彼は自分の年齢に不安になる。そのような Mosca 伯を嫉妬から太公はさらに残酷にからかう。つまり、Sansevérina 公爵夫人が Fabrice を愛していると Mosca 伯に密告する。伯の苦惱は頂点に達する。

〈…elle l'aime comme un fils depuis quinze ans. Là gît tout mon esprit : comme un fils … mais elle a cessé de le voir depuis sa fuite pour Waterloo ; mais en revenant de Naples, surtout pour elle, c'est un autre homme. Un autre homme, répéta-t-il avec rage, …〉 — [25]

このように気も狂るわんばかりに懊惱する Mosca 伯はその夜は公爵夫人の部屋へゆくまいと決心するが、我慢できなくなった彼は夜半にもかかわらずゆくことになる。ところが案の定 Sansevérina は Fabrice と2人きりであった。伯の話を夫人は上の空で聞いている。遂に Mosca は残忍な考えにとらわれて実行に移そうとする。彼は短剣を手にとり Fabrice を刺殺し自分も自殺しようとするが果すことができない。

〈Il devenait fou ; il lui sembla qu'en se penchant ils se donnaient des baisers, là, sous ses yeux. Cela est impossible en ma présence, se

dit-il…> — [26]

だが、決定的な思いに突きあたると彼のあらゆる決意は消失してしまう。今、狂人のようにになっている彼の頭脳にあってもその思いだけは明白である。Mosca 伯は思う。ここで無礼を働けば夫人を失う。と。

〈et là, ou pendant le voyage, le hasard peut amener un mot qui donnera un nom a ce qu'ils sentent l'un pour l'autre ; et après, en un instant, toutes les conséquences.〉 — [27]

此の Mosca 伯の Fabrice に対する嫉妬から遂に Sansevérina は Fabrice に覚えている感情の性質を考えざるを得なくなる。夫人は侍女から Mosca 伯の穿鑿を知って泣きくずれながら少年から青年に成長した Fabrice を自分が愛しているのではなかろうか。と、深い煩悶に捉われることになる。一方、Fabrice は叔母である公爵夫人に〈あなたを愛している〉と、告白する破目になることを極度に怖れる。此の緊張を避けるために彼は恋愛劇を演じる。丁度、相手も女優である Marietta である。この女には Giletti というコメディアンが保護者と称してついている。かくて舞台の幕があく。街道で Fabrice は Giletti を殺して官憲の目を逃れてポローニャに着く。そこで Marietta と同棲する。ところが今度はある伯爵の情婦 Fausta に恋をしかける。だが、彼は恋の所作を絶えず註釈つきでやってのける。恋人はこんな具合に女を扱うのであろう。と、だから彼は上巻の終章で、

〈Fabrice osa revenir à Bologne, plus convaincu que jamais que sa destinée le condamnait à ne jamais connaître la partie noble et intellectuelle de l'amour. C'est ce qu'il se donna le plaisir d'expliquer fort au long à la duchesse…〉 — [28]

と、作家は Fabrice の心を描写しているが、叔母が彼に抱いている愛を Fabrice は避けたいが目的で、自分は誰をも真剣に愛する資格がない。と、叔母にも告げ同時に自分にもそのことを納得させることに執心している。下巻に入ると、彼がパルム宮廷内の政争から Blanès 師の予言通り投獄される

描写が第14章 第15章と続く。そして、Clélia との再会がまた憲兵たちを保証人に行なわれる。

«—Il me semble, mademoiselle, lui dit-il, qu'autrefois, près d'un lac, j'ai déjà eu l'honneur de vous rencontrer avec un accompagnement de gendarmes.

Clélia rougit et fut tellement interdite qu'elle ne trouva aucune parole pour répondre.» — [29]

このように彼女は気持が乱れてしまい口をきくことが不可能であった。この態度は Clélia にしてみれば 2 重の不幸となった。返事ができなかったことから Fabrice が自分を愚かな娘と看做すであろうこと、今 1 つはコモ湖の岸であれほどの恩を受けながら知らぬ顔をしていた忘恩がそれである。

Fabrice が牢獄に入れられたその夜、公爵夫人は内務大臣 Zurla 伯の夜会にあでやかな姿を見せていた。Zurla 伯が Fabrice 逮捕の当時者であることをまったく知らない夫人は陽気に振舞っているが、すでに Fabrice の逮捕を知っている Clélia の瞳はかかる夫人を眺めて異常に輝く。一方、夫人もかかる Clélia を認めて驚かざるを得なかった。

«… depuis une heure elle la (=Clélia) regardait avec un plaisir assez rarement senti à la vue d'une rivale. Mais que se passe-t-il donc? se demandait la duchesse; jamais Clélia n'a été aussi belle, et l'on peut dire aussi touchante: son cœur aurait-il parlé? … Mais en ce cas-là, certes, c'est de l'amour malheureux, il y a de la sombre douleur au fond de cette animation si nouvelle…» — [30]

事実、Clélia は夫人に執って恋仇となるが、それを知るよしもない夫人は Clélia の情熱の相手の穿鑿に熱中している。夜会が始まって 10 時頃夫人は Fabrice の逮捕を知らされることになる。

«… elle pâlit excessivement; Clélia lui prit la main et osa la lui serrer. — Je vous remercie et je vous comprends maintenant … vous

avez une belle âme !》 — [31]

そして、Clélia は涙を見せまいと必死にこらえながら公爵夫人がサロンを去ってゆくのを眺めて、心のなかで思うのである。

〈Jamais je n'oublierai ce que je viens de voir ; quel changement subit ! Comme les yeux de la duchesse, si beaux, si radieux, sont devenus mornes, éteints, après le mot fatal que le marquis N. est venu lui dire ! … Il faut que Fabrice soit bien digne d'être aimé ! …〉 — [32]

と、夫人が Fabrice に覚えている愛に Clélia は思いを高める。そして、彼女は5年前のあの邂逅を想起する。Fabrice の母と公爵夫人が如何に大事に彼を扱っていたかを追想し、夫人の愛情の深みを彼女は推測する。それは Stendhal が恋愛の第1歩と看做している驚愕を Clélia に与えることになる。つまり、Clélia の関心は Fabrice を絶えず的とせざるを得なくなる。

Sansevérina は彼を逮捕されたことで太公に裏切られたのである。やがて、夫人はこの仕打を太公の命を奪うことで復讐する。しかし、復讐を誓ったとしても彼女の苦悩は癒されることはない。Zurla 伯爵邸から帰った夫人は苦悩の果てに狂人の如くなる。それでも彼女は Julien の如き行為に出て舞台から消えることを許されていない。Stendhal は心痛から狂乱の境界線をさまよう彼女の姿を饒舌に描写し続ける。これ程辛い立場におかれた女性がこんなに克明に描かれた例はない。それは多分次の理由からであろう。作家は夫人が Fabrice を熱烈に愛しているのに、その事実を彼女自身にこの場に及んでも悟らせまいとしているからである。

〈Comment peindre le moment de désespoir qui suivit cet exposé de la situation, chez une femme aussi peu raisonnable, aussi esclave de la sensation présente, et, sans se l'avouer, éperdument amoureuse du jeune prisonnier ? Ce furent des cris inarticulés, des transports de rage, des mouvements convulsifs, mais pas une larme.〉 — [33]

にもかかわらず作家は夫人の狂乱が一応落ち着きを取り戻すと、そうした狂乱が何に原因しているのかを作中人物にも告白せざるを得なくなる。

〈Puisque je ne peux fuir ce lieu détesté, il faut que j'y sois utile à Fabrice : vivre seul solitaire, désespérée ! que puis-je alors pour Fabrice ? Allons, marche, malheureuse femme ; fais ton devoir ; va dans le monde feins de ne plus penser à Fabrice … Feindre de t'oublier, cher ange !〉 — [34]

やがて、彼女の気持は落ち着いて冷静に事態を観察し始める。そうなる
と、彼女が真先に口惜しいと残念がるのは Mosca 伯の廷臣ぶりであった。
夫人は伯が悪るい人ではないが気の弱い人であり、彼女自身や Fabrice の
持って生れた心の高貴性がないことを認識する。それで、彼女は伯に別れた
いと申しでるとともに彼女が Fabrice に覚えている愛の性質に触れている。
つまり、その愛の性質は本能的なものであり、第3者から非難されるような
関係は一度もないと伯に告げる。そうした告白にもかかわらず伯の口から
Fabrice の名が洩れると夫人は異様になり痙攣する。こうした精神錯乱を伴
う彼女の煩悶は Fabrice が出獄するまで続くことになる。彼が毒殺される
という噂さが絶えず流れていたからである。作家は Fabrice を牢獄に入れた
儘にしていたが、夫人の心理描写がすむと、Fabrice の描写に励む。彼は
Clélia との邂逅が5年前であったと夢想している。突然、彼は自分が何処に
いるのかを知る。その思いは Blanès 師の予言につながる。

〈Quoi ! j'ai besoin de me raisonner pour être affligé de cette prison, qui, comme le dit Blanès, peut durer dix ans comme dix mois?〉 — [35]

塔牢の窓下が Clélia の部屋であり社交界嫌いのためか彼女は小鳥を飼っている。Fabrice はその小鳥が彼女のものであることを知る。小鳥の世話を
するために必らず Clélia がそこへ姿を見せる筈である。塔上に居る Fabrice
と塔下に居る Clélia とだけの世界が始めてここで描写されることになる。

〈Il la suivait ardemment des yeux : … Ne sommes-nous pas seuls au monde ici? se dit-il pour s'en donner le courage. Sur ce salut, la jeune fille resta immobile et baissa les yeux ; puis Fabrice les lui vit relever fort lentement ; et évidemment, en faisant effort sur elle-même, elle salua le prisonnier avec le mouvement le plus grave et le plus distant, mais elle ne put imposer silence à ses yeux ; sans qu'elle le sût probablement, ils exprimèrent un instant la pitié la plus vive. Fabrice remarqua qu'elle rougissait…〉 — [36]

Clélia は同情から Fabrice に心を奪れる。彼女自身は Fabrice に覚えた気持が憐恤から恋心に変化してゆく気持には躊躇せざるを得ない。Mosca 伯がそうと気づくより以前に彼女は Sansevérina が Fabrice に抱いている愛を見抜いていたからである。だから彼女は公爵夫人の心の悲痛を思いやる。そして、一方、肝心の Fabrice は公爵夫人のことも Mosca 伯のこともパルムの宮廷もまったく念頭にない。あるのは Clélia だけである。かくて作家は Clélia が公爵夫人以上に Fabrice を愛する姿を読者に画く必要にせまられる。

〈… personne dans Parme ne doutait que Fabrice ne fût bientôt mis à mort : lui seul l'ignorait ; mais cette affreuse idée ne quittait plus Clélia, et comment se serait-elle fait des reproches du trop d'intérêt qu'elle portait à Fabrice? il allait périr ! … Il est vrai que cet aimable jeune homme était attaché à une autre femme ! Clélia était profondément malheureuse, et sans s'avouer bien précisément le genre d'intrêrêt qu'elle prenait à son sort : …〉 — [37]

Clélia はこのように Sansevérina の存在を意識しながらも Fabrice のことが忘れなくなる。日除が取りつけられて Fabrice は Clélia と会い見ることが不可能になっていた。この事情をあらかじめ知っていた Clélia は日除をじっと眺めて彼のことを考えていた。ところが突然、日除の一部が外さ

れて彼が顔を見せ、彼女がそこに来ていたことが知られてしまい、Clélia は狼狽のあまり逃げ去る。Fabrice は疑う余地のない Clélia の愛を見た。そして、作中人物の創造者である作家はその瞬間が彼の生涯のなかで比類のない最も美しいものであった。と、Fabrice の心を代弁しつつ、一方では Clélia に彼女の心理状態を悟らせる。その日も町の噂さでは Fabrice が遂に処刑されるとのことであった。だから Clélia は姿も隠さず鳥部屋で1時間半も Fabrice と話をしていた。そのとき、Clélia はもう自分の気持を偽ることができなくなっていた。その証拠に彼女は Sansevérina を心の底から憎悪していたからである。夫人に執って Clélia がこうした態度にでるのは仕方がないとしても、次の Fabrice の独白を知ったら彼女は気がふれてしまったであろう。

〈…pour lui, à cette heure, elle avait cinquante ans, —Grand Dieu ! s'écria-t-il avec enthousiasme, que je fus bien inspiré de ne pas lui dire que je l'aimais ! Il en était au point de ne presque plus pouvoir comprendre comment il l'avait trouvée si jolie.〉 — [38]

Clélia を熱愛している Fabrice に執っては Sansevérina は追憶という名の過去の時間でしか生きていない。彼に執って現在の時間に生きている女性は Clélia のみである。

〈…tandis que l'image sublime de Clélia Conti, en s'emparant de toute son âme, allait jusqu' à lui donner de la terreur.〉 — [39]

これらの引用文は第18章のものである。従って、第19章は Clélia の自分に対する気持を決定的に確認したいと願う Fabrice のあせる恋心が文章を走っている。夫人と彼との愛を真摯なものと思こんでいる Clélia は容易に Fabrice の気持を受け入れる気になれないでいる。しかし、彼が毒殺されるかもしれぬ不安が彼女の心を動揺させて彼の熱心な懇願に負けて兩人は上と下で会話をかわすようになる。

こうした2人をよそに Clélia の結婚話がもちあがる。Mosca 伯が

Fabrice の事件のために失脚の兆が見えると、Fabio Conti は野心実現の好機とばかり自己の素志を達成しようと娘の Clélia を Crescenzi 侯と政略結婚させようとした。拒めば修道院へゆかざるを得なくなり、Fabrice と会えなくなる彼女は仕方なしに承知する。Crescenzi 侯は婚約を祝して Clélia のためにセレナーデを頻繁に演奏させる。Fabrice は気になるが恋する弱みから彼女に気兼ねして訊ねずにいる。こんなとき、また、Fabrice が毒殺されるという噂さが一段と真剣に騒やかれるので、Clélia はピアノを引いて彼に毒殺の件を知らせようとする。しかし、いっそう、確実な通信手段を望む彼は聞えないふりをし、遂にシャツを破いて紐を作り、Clélia と直接通信する。

第20章に入ると Fabrice の脱獄が描写される。Sansevérina 夫人の辛苦が報いられて光の明滅による通信が可能になる。近い将来脱獄させるという合図も彼は Clélia を愛している今嬉しくない。Fabrice が憂鬱そうにしているので不安になった Clélia はその理由を訊ねる。

←Je me vois sur le point de donner un grave sujet de mécontentement à la duchesse.

—Et que peut-elle exiger de vous que vous lui refusiez? s'écria Clélia transportée de la curiosité la plus vive.

—Elle veut que je sorte d'ici, lui répondit-il, et c'est à quoi je ne consentirai jamais.

Clélia ne put répondre, elle le regarda et fondit en larmes.▶ — [40]

実際、Fabrice は牢獄から出たくないと、ランプの光で公爵夫人に会図した。夫人の方は彼が気がふれたと思うが、Clélia は自分のせいで彼が牢に留まると思うと嬉しい反面辛らくなり、公爵夫人の命令をきかないのなら修道院へゆくと彼に告げる。

傲慢な Sansevérina の態度に立腹した大公は Fabrice を本気に毒殺しようと Rassi とその手段を企だてる。ところが男爵になりたい Rassi は大公

を裏切り一切を Mosca 伯に告げる。伯は夫人にこのことを知らせる。それで、夫人は脱獄準備の合図を Fabrice に送る。

第21章に入ると夫人が泥棒にして自由主義者の Ferrante と知りあう。Balzac がいみじくも Don Quichotte と正鵠をについて名付けた如くイタリアに共和制が到来することを夢みる男である。そして、彼自身もその実現が夢物語であることを知っているがゆえに垣間見た公爵夫人を熱愛する。真に愛する者はすでに相手の奴隷とならざるをえないものである。かくて夫人は彼に助勢を頼む。彼は Napoléon に味方したという理由で死刑を宣告されて逃亡している熱狂的な男である。Ferrante は Fabrice の脱獄を援護し、その後、夫人の意図を見抜いて太公を弑殺する。丁度、その頃に Crescenzi 侯の妹の結婚式があり、そのおり夫人は Fabrice が脱獄の際に使用する綱、文字通りそれは Fabrice の命綱であるが、その綱を Clélia に預ける。Clélia は父の敵に協力することになる自己を責めながらも Fabrice を愛するがゆえに夫人との約束を実行する。

第22章は Fabrice の脱獄が舞台となる。彼は逃亡には成功したものの愛する Clélia から遠く離れたために自由の身になっても一向嬉しくない様子である。Sansevérina は彼が恋をしていて相手が Clélia であることを知り、自己の年令のことを考えたりして Fabrice をつい責めてしまった。このような卑俗な考えを抱いた自己を夫人は面目なく思う。なぜなら Sansevérina に執って高貴性の失格を意味したがゆえに無惨な気がしたのである。そして、Fabrice は逃亡の地でパルムの塔や Clélia の部屋を画いて暮らしていた。夫人の従僕の Ludovic から彼は悲報を聞く。その報告とは Clélia と Crescenzi 侯との挙式が迫まると同時に彼女が病気がちであるとのことであった。あるとき、パルムの大公が亡くなったことが報告された。遂に Ferrante が夫人との密約を実行したのであるが、此の予定された報告を聞いた夫人は Clélia のことばかり恋想する Fabrice を眺めながらつぶやく。

«La duchesse regarda Fabrice. J'ai fait cela pour lui, se dit-elle ;

j'aurais fait mille fois pis, et le voilà qui est là devant moi indifférent et songeant à une autre !> — [41]

夫人の長いモノローグが終る頃、Mosca 伯から大公が亡くなったという正式の書簡が届く。それで、また、宮廷描写を作家は始める。まさしく Balzac が評した如く Machiavel の世界が展開される。

〈Enfin, il (=Stendhal) a écrit Le Prince moderne, le roman que Machiavel écrivait, s'il vivait banni de l'Italie au dix-neuvième siècle.〉
— [42]

しかしながら、此の第23章に於ける夫人の長いモノローグを読むと、われわれ読者に彼女自身がこの作品で演じている役割を聞かせてくれる文章がある。それをここに引用して観たいと思う。

〈J'aimerai Fabrice, je serai dévouée à sa fortune ; mais il ne faut pas qu'il rompe le mariage de la Clélia, et qu'il finisse par l'épouser... Non, cela ne sera pas !> — [43]

夫人は Blanès 師が Fabrice に予言した通り罪を犯して彼を牢獄から救出したし、そればかりか先述した如く彼女自身が予言した女性の彼に対する献身を自ら果してきたことを上記のセリフは端的に示唆している。勿論、Clélia とて牢塞長官である父を裏切ることで、倫理的犯罪をなし、Blanès 師の予言の役、換言すれば作家の創作上の伏線の役を Sansevérina とともに実行する結果となっている。

第24章に読者が目を移すと、パルムに戻った夫人が才能を遺憾なく駆使する姿が眺められる。彼女は例の難題極まる3件を巧妙に裁く。第1は Fabrice に対する判決文の処理。第2は彼の逃亡を助けた者たちに対する当局の追求の回避。第3は大公暗殺の1件。これらを夫人が巧みに処理してゆくあいだに第25章の幕があく。

Fabrice がパルムに到着していることを知った Clélia は生きた心地がしない。彼女はかって彼が幽閉されていた塔を眺める。作家はそこまでは描写

していないが、多分、Clélia は毎日 Fabrice がいた部屋を眺め暮らしたであろう。ところがどうしたことかそこには Fabrice がいて彼女に晴やかに挨拶しているのを認める。Clélia は今度こそ彼が殺されることを知っている。Fabrice の脱獄で彼女の父を先頭に牢獄に勤務するすべての者が彼を憎み切っていたからである。食事の時刻が迫まる。毒入りの食膳が彼のところへ確実に運れるにちがいない。牢舎の料理場で働いている老婆が Fabrice は足を先にして牢獄から出る筈であると、彼女に話す。さらに彼女の叔父の don Cesare 師も兄の長官と喧嘩別れをして牢塞から去る。かかる光景を目撃した Clélia は〈夕食のとき毒を盛った〉と、思う。事実、彼女が直観した通り食物に毒を混入していた。それで Clélia は今こそ夫を助けねばならないと思う。こう決心すると彼女は躊躇することなく行動に移る。長官の娘である特権を利用して牢番の制止をふり切り Fabrice の牢へ駆け登る。彼はまさに食べようとしていた。彼は彼女から恰も妻が夫にものを言う調子で〈あんた食べたの、〉と、訊ねられて驚喜し、Clélia を抱擁し接吻する。しかし、まだ手をつけていないと返事をしたら恐らく Clélia のこと信仰心に戻り、抱擁から脱けてこの場を去ることを Fabrice は感じとる。それで、彼は彼女を偽り自分は毒がまわりやがて死ぬと答える。かくて Clélia は Fabrice が余喘にあると信じ、

〈—O mon unique ami ! lui dit-elle, je mourrai avec toi. Elle le serrait dans ses bras, comme par un mouvement convulsif.〉 — [44]

あらん限りの情熱を見せる Clélia は美しく無意識に Fabrice は衝動に移る。そんな彼の衝動に彼女はまったく抵抗を見せなかった。

〔註1〕に就いて、Sainte-Beuve のこの批難は『Causeries du Lundi』のなかで註釈の形式を執って語られている。彼はこれから述べることは真実であると、あらかじめ断っている。

〈…Vers ce temps, Beyle vendait à la Revue des Deux Mondes une

série de nouvelles italiennes qu'il se proposait de faire et dont il n'y eut qu'une ou deux d'achevées. Il reçut pour cela la somme de 3,000 fr... Or, à sa mort, on trouva dans ses papiers la preuve que ces 3,000 fr. avaient été donnés ou prêtés par lui à Balzac qui fut ainsi payé de son éloge : un service d'argent contre un service d'amour-propre. M. Colomb, ami intime de Beyle, et qui eut à mettre en ordre ses papiers, a lui-même certifié le fait. > — [45]

此の文章のあとで Sainte-Beuve 自身は文学的名誉と金儲が同居しているのは私の気持を苛立たせると称している。そして、Stendhal に就いて彼がこの註をも含んで語っているのは、Stendhal が亡くなって約 10年がすぎた 1854年のことである。Sainte-Beuve は若い世代が Stendhal を復活させようとしている。と、先づあらためて Stendhal を取り挙げた理由を述べている。勿論、此の論文のなかで彼は『Chartreuse de Parme』を論考しているわけであるが、あまり好意的なものではない。と言うのは Stendhal がイタリアを熱愛していることが彼には面白くないらしい。それで、彼は Stendhal が嘲諷の対象としたフランスを擁護したいと主張している。具体的には Stendhal がこの小説で描写した情熱的恋愛の典型と看做すイタリアの恋愛よりもフランスのそれの方が自分は好きである。と、述べている。それゆえ、かかる見解と言うよりもむしろ偏見とも言える見解を基準にこの小説を正当に批評することができたのであろうか疑問である。

引用文の原典、及び、その頁

- [1] Henri Martineau : L'Œuvre de Stendhal. Ed. Albin Michel p. 536.
- [2] Jean Prévost : La Creation chez Stendhal. Ed. Mercvire de France p.346.
- [3] Henri Martineau : L'Oeuvre de Stendhal. Ed. Albin Michel p. 542.
- [4] Ibide., p. 543.
- [5] Balzac : Etudes sur M. Beyle, Analyse de La Chartreuse de Parme. Ed. D'art Albert Skira. p. 12.
- [6] Ibide., p. 13.

- [7] Balzac : Lettres a *M^{me}* Hanska 1 Ed. Les Bibliophiles de l'Originales p. 639.
- [8] Henri Martineau : L'Œuvre de Stendhal. Ed. Albin Michel p. 550.
- [9] Stendhal : Vie de Henri Brulard. Ed. Pléiade p. 50.
- [10] Henri Martineau : Le Cœur de Stendhal. Ed. Albin Michel p. 279.
- [11] Stendhal : Le Journal Ed. Pléiade p. 1113—1114.
- [12] Stendhal : Corr., 1812—1816 IV. Ed. Le Divan p. 308—309.
- [13] Stendhal : Journal Ed. Pléiade p. 1299.
- [14] Stendhal : Corr., 1816—1812 IV. Ed. Le Divan p. 333.
- [15] Henri Martineau : Le Cœur de Stendhal. Ed. Albin Michal p. 174.
- [16] Stendhal : Corr., 1821—1830 VI. Ed. Le Divan p. 318—319.
- [17] Stendhal : Corr., 1832—1834 VIII. Ed. Le Divan p. 66.
- [18] *Ibide.*, p. 272.
- [19] Stendhal : La Chartreuse de Parme. Ed. Pléiade p. 49.
- [20] *Ibide.*, p. 51.
- [21] *Ibide.*, p. 171.
- [22] *Ibide.*, p. 55.
- [23] *Ibide.*, p. 101.
- [24] *Ibide.*, p. 136.
- [25] *Ibide.*, p. 154.
- [26] *Ibide.*, p. 157.
- [27] *Ibide.*, p. 157.
- [28] *Ibide.*, p. 244.
- [29] *Ibide.*, p. 269.
- [30] *Ibide.*, p. 274.
- [31] *Ibide.*, p. 275.
- [32] *Ibide.*, p. 276.
- [33] *Ibide.*, p. 280.
- [34] *Ibide.*, p. 282—283.
- [35] *Ibide.*, p. 314.
- [36] *Ibide.*, p. 316.
- [37] *Ibide.*, p. 321—322.
- [38] *Ibide.*, p. 322—323.
- [39] *Ibide.*, p. 323.

- [40] *Ibide.*, p. 342.
[41] *Ibide.*, p. 403.
[42] Balzac : *Etudes sur M. Beyle, Analyse de La Chartreuse de Parme* Ed. D'Art Albert Shila p. 17.
[43] Stendhal : *La Chartreuse de Parme* Ed. Pléiade p. 404.
[44] *Ibide.*, p. 437.
[45] Sainte-Beuve : *Causeries de Lundi* T. Neuvième. Ed. Librairie Garnier Frères p. 338.

副論文その五 Stendhal と Cabanis

〔序論〕

Stendhal と Helvétius を論考した際に私は *Idéologue* は Stendhal が現実の生活でバイブルとしていたと比喩したけれども、実は彼自身が Cabanis の『*Rapports du physique et du moral*』は自分に執ってバイブルであったと、『*Souvenir d'Egotisme*』の第五章で回想しているのである。その文章を引用しておく。

〈M. de Tracy avait été l'ami intime du célèbre Cabanis, le père du matérialisme, dont le livre : *Rapports du physique et du moral*, avait été ma bible à seize ans.〉 — [1]

〔本論〕

Stendhal が Cabanis を本格的に研究し始めたのは1805年の1月以降と思われるが、われわれが Cabanis の名を読むのはそれより2年前の1803年のことである。丁度、10年後の1813年7月20日の日記に次の如き回想が読まれるからである。

〈Je pense en 1803 à Sagan que nous étions trop sévères envers Cabanis...〉 — [2]

此の引用文から明察される通り最初の研究では Stendhal は Cabanis を好意のある態度で読みはしなかった。1805年1月24日に次のような不満を覚

えたと洩らしている。

〈Je vais à l'école de Médecine, à dix heures pour lire l'Aliénation Mentale de Pinel : la bibliothèque est fermée. Je vais au Panthéon, je lis le premier Discours de Cabanis sur les Rapports du physique et du moral. La manière d'énoncer les faits me semble si général qu'elle en est vague. Cet auteur ne me plaît point, lire Bacon et Hobbes.〉

—〔3〕

しかしながら、後年、序論で指摘した如くかかる見解を Stendhal は撤回することになるのであるが、約30年後に書かれた『Vie de Henry Brulard』では Cabanis に対して1805年の時点で示した厳しい態度を忘れて尊敬の念を披瀝している。

〈…et lisant La Bruyère, montaigne et J. —J. Rousseau dont bientôt l'emphase m'offensa. Là se forma mon caractère. Je lisais beaucoup aussi les tragédies d'Alfieri, m'efforcant d'y trouver du plaisir, je vénérerais Cabanis, Tracy et J.—B. Say, je lisais souvent Cabanis dont le style vague me désolait.〉 —〔4〕

さて、Stendhal がどのように Cabanis の哲学を把握して彼自身のものとしてゆくかを研究するためには、Cabanis の Sensualisme を十分に理解していなければならないが、Helvétius, de Tracy と同じく、Cabanis も19世紀に Condillac の Sensualisme を伝えた。Cabanis が Mirabeau の主治医であった事実から推察されるが、彼の Sensualisme は生理学と合成され、いわゆる今日の心理学を誕生させていると評価されている。それで、Cabanis によると認識は外的感覚からのみ生ずるばかりでなく内的感覚からも生ずる。実例を挙げると外的刺戟がなくても夢や狂気や神経の故障などが存在している。此の事実から内的感覚が外的感覚同様、存在していることを Stendhal の言葉で発言すれば Cabanis は観察しているのである。要するに Cabanis が無意識の行為を問題として扱っているところに、Condillac,

Helvétius, de Tracy との相異点をわれわれは観る。だから彼によると Condillac のあの有名なロボット以前に胎児のうちから人間は認識可能となることになろう。

それゆえ、Stendhal が Cabanis を研究することで、彼は Condillac, Helvétius, de Tracy などの単数的〈Vision du monde〉から復数的〈Visions du monde〉へ開眼され、人間の認識がより複雑なることを Cabanis から示教されることになる。

Stendhal は先に Helvétius の哲学に次の如き不満を抱いていた。

〈J'ai enfin lu un ouvrage qui me semble bien singulier, sublime en quelques parties, méprisable en d'autres, et bien décourageant en toutes : l'Esprit d'Helvétius. Ce livre m' avait tellement entraîné dans ses premières parties, qu'il m' a fait douter quelques jours de l'amitié et de l'amour. Enfin, j' ai cru reconnaître qu' Helvétius, n' ayant jamais senti ces douces affections, était, d'après ses propres principes, incapable de les peindre. Comment pourrait — il expliquer ce trouble inconnu qui saisit à la première vue, et cette constance éternelle qui mourrit sans espérance un amour allumé? Il n'y croit pas à cette constance dont j' ai oui citer tant d'exemples ; y croyez-vous vous-même? Croyez-vous?〉 — [5]

此の手紙が書かれた時期に Stendhal は彼の友人 Edouard の妹 Victorine を己の Julie と看做して思いをよせたのであるが、空しい恋であった。従って、彼の心は〈ce trouble inconnu〉で一杯であった。

此の文章で問題となっているのは自分自身にも判然としない無意識の行為である。かかる認識の領域に於いては Helvétius も de Tracy も完全に無力である。それで、このような無意識の領域で Stendhal に光明を与えて呉れたのが Cabanis であった。勿論、Stendhal はこの Cabanis の次の Biran を研究してさらに光明の度をこの領域で高める。

次に引用する文章は Stendhal が Helvétius から感じた不満を解消するのに役立ったであろう。また、此の文は Stendhal が Cabanis をどのような研究し把握しているのかをわれわれに教旨しているものである。

〈Je vois dans Cabanis que nous agissons souvent pour satisfaire à des besoins qui viennent d'après des idées qui viennent de l'intérieur du corps au cerveau. La réunion des désires qui nous viennent de cette manière se nomme instinct. Condillac a entièrement méconnu l'instinct.〉 — [6]

Stendhal は Henry Brulard の教育の完成が 1803年から 1806年にかけて終ったと述べている如くこの Cabanis を読んでいた時期に古今の有名な劇作、例えば、Racine, Corneille, Molière, Shakespeare などのもの、あるいは小説では J.-J. Rousseau や Mme de Staël のものを読みながら、一方では、これら作品の創作の秘密を、Helvétius や de Tracy, それに現在われわれがテーマとしている Cabanis などの種々の観念を適用して、明白にしようと研究に余念がなかった。そして、Stendhal は窮極は人間の認識こそが創作力を増大させる秘訣であることを悟った筈であった。

先に副論文その四で『Stendhal と Helvétius』というテーマで Helvétius を論じたのであるが、Helvétius の絶えざる注意力、すなわち、ものにうちこむ情熱、そうした情熱こそが全てであるという命題にあって注意力は内的要求、換言すれば願望に他ならない。従って、Cabanis に於いては Helvétius の命題は心理学的分野に前進している。かかる一連の Idéologue の真髓を着実にたどる Stendhal が人間の情熱や愛に就いての知識を確実に自己の智慧袋に収めてゆくことになる。

続いて、2月7日の日記には、Helvétius と Cabanis から得た観念を Stendhal は見事に結晶させているのが観られる。

〈Les hommes ont des passions différentes. L' amour senti par Crozet n' est point le même que l' amour senti par Beyle (=Stendhal). C' est

tout simple, ils ne peuvent être charmés par les mêmes objets, puisque ces objets leur font des impressions différents et qu'ils mettent leur bonheur dans des états différents et l'âme et du corps, ou, pour mieux dire, du dernier seul, corps étant pris dans le sens de Cabanis.》—〔7〕

人間はそれぞれ個々の体格が異なるように、それぞれ気質も異なる。よく言われるように文字通り十人十色なのであるから個々の趣味も千差万別である。此の事実を Stendhal は上記に引用した文章に観られる通り Cabanis から啓示されたことになる。

Stendhal が述懐しているように 1816年に Cabanis の『Rapports du physique et du moral』が彼に執ってバイブルであったと看做していることから以下のは容易に推察しうる。すなわち、翌年の1817年、彼の友人 Crozet との協力になる『Histoire de la peinture en Italie』は Stendhal がこのバイブルをそのまま適用しているのが観られる。人間の行為の動機を説明するのに大いに役立てている。

今一度 1805 年に戻るが、此の年から数年が経過した 1811年に Stendhal は先述した Crozet と共に Cabanis を熱心に研究していたのである。彼の Cabanis に対する傾倒ぶりは例の如く妹 Pauline に伝わる。

《Tu dois être ennuyée de Cabanis. Voici un extrait que Crozet et moi avons fait de la partie la plus essentielle : les tempéraments.》—〔8〕

これまで引用してきた殆んど文章が明らかにしている通り、彼は Cabanis を読み始めた当初ばかりでなく上記引用文にも読まれる通り数年をすぎてもなお、彼は Cabanis に対して膜然とした不満を覚え続けた。というのも数学を愛好して明解を重要視する Stendhal は Cabanis の単なる事実を観察に理論的根拠の稀薄を認めて不安を覚えざるを得なかったのである。彼はその観念に帰納法を認めるに至らなかったのである。

しかし、人生は何時までも学校ではない。人間認識の秘密は実生活の体験あってこそ、その人間に開ける鍵を与えるものである。理屈では割り切れないものも人生体験の豊饒さが彼に証明を感じさせる。Cabanis に Stendhal が示した態度は正しくかかるものであったと言うべきであろう。

1813年になると Stendhal は Cabanis 哲学を承認する立場を示した。彼の Cabanis 観は変化したのである。すでに本論の冒頭で引用したし 1813年 7月20日に次の如き反省の色彩が濃い告白が日記に読まれるようになった。

〈Je pense en 1813 à Sagan que nous étions trop sévères envers Cabanis. Il fallait voir dans son livre des observations et non des assertions. Peut-on nier à un astronome qu' une comète par lui observée a fait tel mouvement?

Il dit l' avoir vu. La cause de ce mouvement, il l' ignore. Cabanis ne prouve point qu'un homme à teint jaune ait nécessairement ce que nous appelons le caractère moral bilieux, il dit seulement qu'il l' a vu …〉 —〔9〕

このように Helvétius や de Tracy の平面的世界観が Cabanis に於いては空間へと拡大され、複数性を呼び立体的世界観となり現実味を帯びてくる。それで、その結果、Stendhal は反省を知り彼の精神も素直にかかる影響をこうむる。人間を認識することに絶えず注意を向けている彼に執って自己ほど確実な研究対象はない。他人の心の動きは理解しがたいが自己の心の分析に於いては意識されたものに対して徹底して臨みさえすれば誤謬に落ちる確率も少ない。此のことが Stendhal をして自己認識の追求に走らせる原因となったのである。

〈La chose qui me manquera le plut tôt lorsque je vieillirai, ce sera la mémoire. Le passage suivant de Cabanis est une description rigoureuse de ce qui se passe en moi. Mon attention se répand sur un objet, et puis passe ailleurs…

、 Etre passionné pour une chose, et puis l' oublier tout à fait, tell est mon histoire, nel comporre... Cela pose et senti bien nettement dans moi, voici le passage de Cabanis :

(Remarquons que la sensibilité se comporte à la manière d' un fluide dont la quantité total est déterminée, et qui, toutes les fois qu' il se jette en plus grande abondance dans un de ses canaux, diminue proportionnellement dans les autres.) — [10]

Stendhal は情熱的でありながらも、ある時には自分ながら冷淡と思える自己の性質を反省しつつ、Cabanis に以上の説明を求めて、自己認識の頂点に到達している。このように Stendhal が私淑する J.-J. Rousseau の性質を説明するのも妥当であるこの文章は、こうした Stendhal の自己認識が結局生涯変ることのないことを、今一度ここで私が主論文の主題として主張し続けたことを明確にしておくものである。

さて、Cabanis の『Rapports du physique et du moral』が Stendhal の『Histoire de la peinture en Italie』に大いに影響していることを指摘しておいたが、F. M. Albérès は『Le Naturel chez stendhal』のなかで次の Cabanis の文章を引用しつつ『Le Rouge et le Noir』における Julien が Rênal 夫人にピストルを射った行為の説明を求めている。

〈…il y a dans l' homme un autre homme intérieur, doué des mêmes facultés, des mêmes affections, susceptible de toutes les déterminations analogues aux phénomènes extérieurs, ou plutôt dont les faits apparents de la vie ne font que manifester an dehors les dispositions secrètes, et représenter en quelque sorte les opérations.〉 — [11]

Cabanis は〈corps〉と〈penser〉に sensation を加算するのであるが、その複雑性と融合性との成果ゆえに現代心理学に接近していると言え得よう。此の意味で F. M. Albérès は Cabanis がその時代より進んでいた尺度で、Stendhal の小説がわれわれの現代小説に近ずいていると比較して

Julien を次の如く解剖している。

〈C' est un autre (homme interieur) qui agit à la place de Ynlien Sorel, lorsque celui-ci abandonne tous les projets qui lui tenaient à coeur pour courir à l'église de Verrières. Ce n'est plus l'être raisonnable et calculateur que nous connaissions, mais un nouveau Julien, qui semble mené par la poussée de l' inconscient, lors de l'éclatement d' une crise.〉 — [12]

此の『La Rouge et le Noir』に就いては私は本学の紀要の第五巻第一号で論考しておいたので私自身の見解に関してはそれを参照して頂きたいと思う。ここでは上記の F. M. Albérès の見解に就いてのみ紹介しておく。

ところで Stendhal は『Lucien Leuwen』のなかでナンシー社交界のみならず愛する Chasteller 夫人の前ですらそれまで無口できこちない様子しか見せていなかった Lucien が突然、ある晩、たいへん饒舌になり皆を驚かせると彼の変貌ぶりを描写している。

〈l' abord madame de Chasteller fut étonnée et amusée du changement dont elle était témoin ; mais bientôt elle ne sourit plus, elle eut peur à son tour... ce n'est point un jeune homme simple et bon... que j' étais sotté de le penser !.〉 — [13]

私はこの『Lucien Leuwen』に関しては本学の紀要第三巻第一号で詳細に研究した作品と作者の關係に主題を求めて論文を発表しておいたが、その際に Lucien は Stendhal の小説にあって他の如何なる主人公たちよりも作家 Stendhal の分身であることの深遠度が強よすぎると示唆しておいた。それで、先述したことや上記引用文に相等する文意のある著述を探すと、『Vie de Henry Brulard』のなかの Cabanis と関連した文章にそれがある。以下に引用しておく。

〈J' ai été homme d'esprit depuis l'hiver de 1826, auparavant je me taisais par paresse, Je passe, je crois, pour l' homme le plus gai et le

plus insensible, il est vrai que je n' ai jamais dit un seul mot des femmes que j'aimais. J' ai éprouvé absolument à cet égard tous les symptômes du tempérament mélancolique décrit par Cabanis. J' ai eu très peu de succès.》 — [14]

次に問題となるのは『La Chartreuse de Parme』に於ける Fabrice の Cabanis 的行為となるであろう。しかしながら私自身はかかる種類の見解を今ここで述べるのは控えたいと思っている。というのは次回の紀要で『La Chartreuse de Parme』の研究を発表したいと目下思案中だからである。それで、此の論文では『Le Rouge et le Noir』の場合と同じく F. M. Albérès の見解を紹介するに留めたいと思う。Albérès は先ず例の如く Cabanis の『Rapports du physique et du moral』から文章を引用することから始める。

《…L' élévation, la délicatesse, la pureté des penchants moraux, dépendant de certaines émotions vives et profondes, qui tiennent à exaltation de la sensibilité générale ou à sa concentration dans certains organes particuliers.》 — [15]

それで、此の引用文章のあとで Albérès は Fabrice に就いて以下の如く論じている。Clélia Conti に恋をした彼が示す態度こそ正に Cabanis の上記引用文を忠実に体現するものであると看做すのである。

《L' émotion ressentie par Fabrice à la vue de Clélia Conti l'exaltation de la sensibilité qu' elle produit soudainement chez lui, le transformeront et le marqueront définitivement ; ce jeune libertin un peu étourdi et aux conquêtes faciles, amoureux de l'aventure et de la vie se découvrit peu à peu ami de la solitude et de la contemplation ; il ne trouvera d'autres bonheurs que de vivre dans une tour, si la voix qui lui plaît peut parvenir jusqu' à ses oreilles.》 — [16]

ここまでわれわれは Stendhal がどのように Cabanis を研究し、把握し、

自己の作品に応用してきたかを詳細に調査してきたのであるが、此の小論を終えるに際して今一度副論文その六との関係もあって、Cabanis 哲学の真髓が如何なるものであるかを確認しておきたいと考える。Stendhal の『Histoire de la peinture en Italie』、及び、三つの小説には上述した通りそれぞれ明確に Cabanis 哲学の影響と指摘しうる場面がある。こうした明証は、彼が Cabanis 哲学を完全に自家薬籠中のものとしていることをわれわれに示唆したものと看做しうるであろう。それで、F. M. Albérès には Cabanis 哲学の本質を見事に要約した文章があるので、それを次に引用したいと思う。

〈Plusieurs philosophes, et même physiologistes, ne reconnaissent de sensibilité que là où se manifeste nettement la conscience des impressions : cette conscience est à leurs yeux le caractère exclusif et distinct de la sensibilité.

Cependant, on peut l'affirmer sans hésitation, rien n'est plus insuffisant pour l'explication des phénomènes idéologiques〉

Autrement dit, l'homme agit souvent sans en prendre conscience, et ses gestes, ses attitudes, sont cependant des manifestations de la sensibilité...

Cabanis a montré ce mécanisme qui existe dans tout homme. Il y a, à côté de l'expérience extreme, une expérience interne, et à côté de l'action volontaire et raisonnée, un automatisme inconscient qui échappe au contrôle du moi.〉 — [17]

われわれの意識と行動とが問題となっているのであるが、ある哲学がそれらをどう扱うかがその哲学の根本命題となり、定義にその真髓を覗くことになるであろうと思う。そして、上記引用の F. M. Albérès の文章はかかる意義に於いて正に Cabanis の哲学なのである。Cabanis のいう〈Sensibilité〉は Stendhal に執って絶えず感じられたものであり、彼が鋭敏に自己意

識しているいわば完治することのない病巣の如きものである。しかし、Cabanis にあってはまた完全に納得しきれなかった無意識と行為の函数関係を Stendhal が Maine de Biran の読者となるにおよび、よりいっそうかかる問題に関しての明晰性を得たと思われる。それゆえ、副論文その六は〈Stendhal と Maine de Biran〉の関係を論考することになるであろう。

引用文の原典、及び、その頁

- 〔1〕 Stendhal : Souvenir d'Egotisme, Ed. Pléiade p. 1459.
- 〔2〕 Stendhal : Journal, Ed. Pléiade p. 1270.
- 〔3〕 Ibide., p. 608.
- 〔4〕 Stendhal : Vie de Henry Brulard, Ed. Pléiade p. 44.
- 〔5〕 Stendhal : Corr., Ed. Le Divan T. I. p. 161.
- 〔6〕 Stendhal : Journal, Ed. Pleiade p. 608.
- 〔7〕 Ibide., p. 796.
- 〔8〕 Stendhal : Corr., Ed. Le Divan. T. III. p. 306.
- 〔9〕 Stendhal : Journal Ed. Pléiade p. 1270.
- 〔10〕 Ibide., p. 1278—1279.
- 〔11〕 F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet p. 95.
- 〔12〕 Ibide., p. 95.
- 〔13〕 Stendhal : Lucien Leuwen, Ed. Pléiade p. 924.
- 〔14〕 Stendhal : Vie de Heury Bralard. Ed. Pleiade p. 46.
- 〔15〕 F. M. Albérès : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet p. 100.
- 〔16〕 Ibide., p. 100.
- 〔17〕 Ibide., p. 96—97.

副論文その六 Stendhal と Maine de Biran

〔序論〕

Maine de Biran の名をわれわれは Stendhal の 1805年頃の日記に始めて読むことになる。例えば次の一、二例挙げてみよう。

〈Acheté pendant nivôse les deux volume de Tracy et maine de Biran, 13 livres.〉 — 〔1〕

《Ce jour devait être un des plus agréables de ma vie, et l'a presque été en effet. J'ai travaillé avec Gripoli à Biran trois heures un quart.》

—〔2〕

Stendhal が Idéologue の研究を深めるとき、最後に Maine de Biran に到達したことは必然の結果である。Stendhal の Idéologue に対する研究の正確な明察ぶりを現代のフランス哲学史は証明している。Stendhal 自身の Idéologue 研究の出発が Condillac であった如く Maine de Biran の哲学上の出発も Condillac であった。しかしながら、Helvétius, Cabanis, de Tracy などがそうであった如くこの Maine de Biran もまた Condillac の〈Sensualisme〉に修正を意図することで自己の哲学を形成することになる。それでは Biran の哲学とは如何なるものであり、如何なる意義を示すものであろうか。此の意義の解明こそ彼の哲学の本質を明らかにすることになる。ただし、此の場合私はあくまで Stendhal との関係に於いて研究したいと思う。そこで、彼が Biran の哲学から何を研究し取得しているのかを明らかにしたいと思う。

〔本論〕

Maine de Biran は、彼が書き続けた日記である『Journal intime』を一瞥すれば一目瞭然としている如く極度に鋭敏な感覚を示している哲学者であった。その一例として次の文章を引用しておこうと思う。

《Je suis, par ma nature, doué de l'aperception interne, et j'ai, pour ce qui se fait an dedans de moi, ce tact rapide qu'ont les autres hommes pour les objets extérieurs.》—〔3〕

此の引用文からも容易に推察されるが、彼の哲学の根は先ず Cabanis の哲学領域におろされることになる。Condillac が感覚をもっぱら外部に求めたのに対して、Biran は Cabanis と共に外的感覚の存在のみではなく、対当の価値で内的感覚が存在することを説明する。例えば、触覚に於いては何物かが皮膚に触れた場合、われわれはくすぐったいような感覚を知覚する。

従って、かかる印象は能動的なものではないので、Biran は受動的印象〈*impressions passives (=sensations proprement dites)*〉と名づけている。

さらに Biran は運動の能力が感覚の根源であることも直観していた。すなわち、Claude Destutt de Tracy が説明する運動と全く同じ意味に於いてである。例えば、われわれが手を動かして物に触れてみる場合である。従って、Biran はこの印象を能動的印象〈*impressions actives (=preceptions)*〉と名づけている。そこで、われわれの観念となる知覚はこの能動的印象を通じてのみ得られることになる。

Biran がこのように自己の哲学を基いた時代をそれ以後の時代と区別して生理学的時代と哲学史は称している。それは 1805年までをいうのであるが、その時代の彼の著作には 1802年の『*Influence de l'habitude sur faculté de penser*』がある。此の著作の題命が示教する如く感覚の場に於ける習慣の作用を重視する。習慣はその性質上から受動的印象と能動的印象とに反比例する属性を有する。受動的印象は深かまるに連れて益々不明瞭になる。われわれが日常体験から認識している如く臭は習慣となることで消滅してしまう。反対に能動的印象は習慣が進むにつれて益々知覚を明瞭にさせる。われわれの観念はこの作業でいっそう明白になる。この事実から認識は能動的印象がその母胎なることを理解するのである。それゆえ、精神の発達には能動的習慣による。

次の段階で Biran は Condillac の〈*Sensualisme*〉を決定的に修正するに至る。Condillac の〈*Sensualisme*〉は認識が事実に基かねばならないに始まる。すなわち、換言すれば一切の事実が還元される原始的事実があることを意味している。ただ、感覚論者は感覚を持って原始的事実と看做する場合、単なる感覚のみでは認識が成立し得ないことに気づかなかつた。此の点に問題があると考えた Biran は感覚に動的要素を附与して、原始的事実とは自発的努力であると定義したのである。此の自発的努力が認識の基石となる。Biran の哲学もここに至ると明らかに Descartes に接近している。け

れども、Biran が〈Sensualisme〉から出発していることが両者の差を明確にしていることはいうまでもないことであるが、Descartes の〈Je pense, donc je suis〉は Biran に執っては〈Je veux, j'agis, donc j'existe.〉となる。かかる唯物論的思考方法の立場をとった彼も晩年には神に就いて思索し、遂に Pascal に接近している。以上が Maine de Biran の哲学である。

では Stendhal がかかる Biran の哲学を研究し如何なる影響を受け、どれ程 Biran の哲学の薫染を受けたのかを以下に明瞭にしたいと思う。Maine de Biran がどれほど感覚の鋭敏な人間であったかを、彼の日記を引用することで説明し、その人間像の一端をわれわれは窺うことができたと思うのであるが、一方、Stendhal も絶えず震える感覚に悩まされる人間であった。Maine de Biran の読書に熱中していた 1805 年当時、彼は女優の Melanie Guilbert に恋していた。彼女の姿を見ると激しい感情の嵐にみまわれてしまい、口をきいて女に気に入られるような文句の一つも言えない自己を情けなく思うのが常であった。

《Je n'ai point eu d'esprit, j'étais trop trouble ; en revanche, en en sortant, il m'est venu une prodigieuse quantité de choses tendres et spirituelles. Quand je serai davantage perception et moins sensations je pourrai les lui dire.》—〔4〕

此の引用文は Stendhal が Biran などの Idéologue から何を研究しようとしていたかを具体的に示唆するものである。余りに烈しく人間はひとを愛する際には自己統制を失い易いものであり、自己の自在は冷静な際にのみ許されるものである。それで、上記の文章に読まれる Stendhal の願望は他ならぬ J.-J. Rousseau 的感受性からの脱出を意識したものであり、彼は脱出の鍵として自己の情熱の分析から始める。そして、その分析の方程式を幾度も指摘した通り Helvétius, de Tracy, Cabanis, 及び、今問題にしている Biran に求める。

〈En lisant Biran qui m'explique les mystères des passions sentis en

moi.〉 —〔5〕

と、日記に記している。

Biran の読書は Stendhal に自己の臆病が治療されるのを感じさせる。Mélanie の前に居て覚える臆病という越えるに厄介な障壁も、一度、乗り越えてしまうともうなんら障害とはならない筈である。臆病という受動的印象も何時も彼女と一緒に居ることになれば、やがて習慣がそれを消去してしまうであろう。このように Stendhal は Biran から示教された。そして、次の如く Biran に感謝した告白を記している。

《Il me semble que je ne connais le bonheur habituel que depuis la lecture de Biran. J'ai passé ce soir 15 une soirée délicieuse avec ce qui m'aurait donné le spleen il y a quinze jours... Je pense à Mélanie, et ce souvenir m'a charmé comme le plaisir lui-même (as the pleasure itself), 〉 —〔6〕

此の引用した彼の日記は1805年2月4日のものであるが、その10日後にも彼は Biran に対する感激を綴っている。

《Ce jour devait être un des plus agréables de ma vie, et l'a presque été en effet. J'ai travaillé avec Gripole à Biran trois heures un quart. Le temps était superbe. J'ai passé quatre heures chez Louason. Je ne l'ai vue qu'un instant tête à tête... 〉 —〔7〕

このように Stendhal が Maine de Biran を本格的に研究し一月余りが経過した3月18日に、彼は Biran 哲学の本質を完全に把握して以下の如き研究成果を納めている。

《...M'exercer à me rappeler mes sentiments naturels, voilà l'étude qui peut me donner le talent de Shakespeare. On se voit aller en jouant, on a la perception. Cette sensation est facilement reproduite par l'ogane de la mémoire ; mais pour se rappeler les sentiments naturels, il faut commencer par faire la perception.

Viola où l'étude de l'Idéologie (Tracy et Biran) m'est utile.

J'ai été très naturel hier dimanche pendant quatre heures que j'ai passées avec elle ; je n'ai pas encore fait la perception, de manière que je ne sais pas encore ce que je lui ai paru. Pour être entièrement dans le genre naturel qui est le véritablement esprit, il faut y être habitué. Pour cela, il me faudrait vivre en société avec Mélanie, au bout de deux jours, j'aurais cette grâce de naturel :

Et la grâce plus belle encore que la beauté... —〔8〕

此の文章を読んで観ると Stendhal が Biran 哲学の本質と看做される習慣や努力の観念を充分に把握していることが理解され、彼はこの取得の知識を彼自身の日常生活に応用するばかりでなく、芸術の具体的要素と看做して重要な研究課題と考えている。

〈C'est ainsi, dit Biran, que l'être habitué aux excitations factices, indifférant dans la jouissance, ce sent cruellement tourmenté dans la privations.

Si cela est vrai, comme il est beau pour le développement : 1° du vaniteux ; —2° du courtisan ; —3° de l'homme à plaisir physiques, Louis XV !

Voilà comme il est utile aux poètes d'étudier l'idéologie...〉 —〔9〕

実際、此の三項目をわれわれは Stendhal の小説の至る所で捜し当てることは容易であるが、例えば、『La Chartreuse de Parme』の大公父子がその典型的姿を読者に感じさせる。

ところで Stendhal 自身が『Vie de Henry Brulard』のなかで回想している如くこの 1805 年の前後に彼の教養が培かわれたたとして、Stendhaliens はこの時期の彼を如何なる人間と観ているのかを F. M. Albérés の『Le Naturel chez Stendhal』から引用しておこう。

〈S'arrachant au moi idéologique, Stendhal cultive, dans ces mêmes

années 1805 et 1806 un moi plus rêveur et plus tendre qui laisse place à la spontanéité et au naturel. Ces deux (moi) de la personnalité de Stendhal ont provoqué sans doute chez lui des crises de nerfs et des moments d'angoisse ; sans cesse il court de l'un à l'autre, du naturel de l'homme aimable au naturel passionné.》 — [10]

私がかかると Stendhal の人間像とは異った見解を持っており、すでにこの点に就いては、Stendhal の人間像を論じた際に明らかにしておいた。〔注1〕

それで、さらにこの 1805 年以降も Stendhal の Idéologue 研究は続くのであるが、本論文ですでに指摘した通りこの Maine de Biran のみが凡そ 20 年余にわたって Stendhal の真の意味でバイブルとなるのである。というのは Cabanis の『Rapports du physique au moral』などを 1816 年に彼は私のバイブルであったと、後年、回想しているが、Cabanis 哲学の発展を Biran の哲学に明察することは容易であり、事実、Stendhal もそうしたと思われる Idéologue の読書ぶりを示している。次の引用文は 1806 年 3 月 4 日の彼の日記である。

〈J'ai joué avec plaisir, les joueurs ne sont pas ridicules. Voilà cependant plusieurs utiles que j'aurai lus cette année, je me trouverai perfectionné l'année prochaine : Logique de Tracy ; Manie de Pinel ; Théorie des sentiments moraux ; Rapports du physique au moral, etc, par Cabanis ; 5, de l'Habitude, par Biran...〉 — [11]

続いて 4 月 13 日にも Tracy, Cabanis, それに Hobbes と並んで Biran の名が読める。

〈Trouver un emploi du temps utile. Pour les moments où l'on se sent sans énergie, dégoûté, qu'on s'ennuie, l'étude des faits peut être l'étude de l'art de conduire son esprit à la vérité. Tracy, Biran. Cabanis, Hobbes.〉 — [12]

此の引用文に読まれる如くあいかわらず Stendhal は人間を知るための研鑽に励んでいる。此の日記より約一ケ年余がすぎた1807年の6月17日には次の記述がある。

〈Je viens de lire le Ld. aven fruit ; je suis en train de lire Tracy (Logique), Biran et l'Homme d'Helvétius…

Si, comme le dit Biran, l'on n'a de mémoire musicale que par les sons qu'on peut reproduire, il faut apprendre à chanter pour se souvenir des beaux airs.〉 — [13]

そして、此の1807年以降は Idéologue の名は殆んど彼の日記に登場してないのであるが、唯、Biran のみが例外である。尤も先述したように1816年に彼は Cabanis の著作を大いに読んだ形跡はある。だが、ここでは日記に限って私は論じているのである。次の引用は1811年5月31日の日記であるが、もう、他の Idéologue の名は記されていない。

〈…Il me semble que Biran a raison ; il dit qu'on ne se souvient pas des sensation qui ne sont qu'un plaisir vif et pur, ou une peine du même genre…〉 — [14]

此の引用文をよく吟味するとわれわれ読者には思いあたは小説の場面がある。すなわち、『Le Rouge et le Noir』のなかで最も問題とされているあの〈ピストルの場〉がそれである。Henri Martineau は Julien の心理喪失を作家 Stendhal が書物から研究したとは思われないと断定しているが、此の文章はかかる研究者の独断を否定するものであろう。

さてこの1811年からさらに10年余がすぎた1820年代の日記に読まれるのは Maine de Biran のみとなり、Stendhal の Idéologue 研究も終り1820年以上より数年前から本格的な創作活動に彼は移っている。

注1に就いて、私は1966年に名古屋大学仏文研究室の『Variétés』で『Stendhal の人間像』と題した論文を発表し、続いてこの論文をさらに研鑽し、岐阜経済大学論集の第4巻2号に同じ題で発表しているので参照されたいと思う。

引用文の原典、及び、その頁

- 〔1〕 Stendhal : Journal, Ed. Pléiade p. 606—607.
- 〔2〕 Ibide., p. 634—635.
- 〔3〕 Maine de Biran : (3 et 4 novembre 1818)
- 〔4〕 Stendhal : Journal, Ed. Pléiade p. 633.
- 〔5〕 Ibide., p. 601.
- 〔6〕 Ibide., p. 611—612.
- 〔7〕 Ibide., p. 634—635.
- 〔8〕 Ibide., p. 677.
- 〔9〕 Ibide., p. 606—607.
- 〔10〕 F. M. Albérés : Le Naturel chez Stendhal, Ed. Nizet p. 175.
- 〔11〕 Stendhal : Journal, Ed. Pléiade p. 791.
- 〔12〕 Ibide., p. 820.
- 〔13〕 Ibide., p. 864.
- 〔14〕 Ibide., p. 1063.

後 記

此の『パルムの僧院』論の発表を機会にこれまでの研究論文を系統的に総括したいと思う。一連の研究論文を『Stendhal の人間像、及び、その作品論』と言う表題で呼ぶことにし、それを二部にわけらる。

第一部、〈Stendhal の人間像〉

主論文その一、〈Stendhal の人間像〉

そして第一部には以下の副論文を併する。

副論文その一、〈Stendhal と Rousseau〉

副論文その二、〈Stendhal と M^{me} Staël〉

副論文その三、〈Stendhal と Helvétius〉

副論文その四、〈Stendhal と Cabanis〉

副論文その五、〈Stendhal と Maine de Biran〉

第二部、〈Stendhal の作品論〉

主論文その一、〈Le Rouge et le Noir に就いて〉

主論文その二、〈Lucien Leuwen に就いて〉

主論文その三、〈La Chartreuse に就いて〉

そして第二部には以下の副論文を併する。

副論文その一、〈Racine et Shakespeare にみられる作者の文学観の変化に就いて〉

副論文その二、〈Mina de Vanghel のModèle に就いて〉